

前田齊泰と「能楽」

著者	石立 尚子
著者別表示	Ishitate Naoko
雑誌名	博士論文要旨Abstract
学位授与番号	13301甲第5106号
学位名	博士（文学）
学位授与年月日	2020-03-22
URL	http://hdl.handle.net/2297/00058759

学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

前田 齊泰と「能楽」

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

MAEDA Nariyasu and “Nohgaku”

人間社会環境学 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) 石 立 尚 子

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) 西 村 聡

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

学位論文要旨

前田齊泰と「能楽」

石 立 尚 子

本論文では、加賀藩 13 代藩主である前田齊泰と能の関わりについて考察する。

齊泰が生きた江戸後期から明治初期は、能が武家の「式楽」から、国の芸術である「能楽」へと役割を移す過渡期にあたる。藩主として齊泰がどのような演能を行ったかについては、加越能文庫の古文書類をもとに編纂された『加賀藩史料』等から探ることができ、金沢の能楽を知るうえで基本書とされる、梶井幸代・密田良二『金沢の能楽』（北国出版社 1972）も、主に加越能文庫の古文書類をもとに記述されている。

近年、能楽研究においては、このような古文書類だけでなく、能楽に関連した絵画資料や能装束・能面へ研究対象を広げることによって、能楽研究をさらに深め、多角的な視点で能楽を考察しようとする試みがある。こうした中、筆者が主な研究対象とするのは、加賀藩前田家伝来の能装束である。

能装束研究において、加賀藩の能装束は独自の展開をみせている。それは、能装束を包む畳紙に墨書がされることで、文字情報を伴わない能装束を含む染織研究においても重要視されている。墨書されるのは、能装束の種類と地色と模様が基本であるが、中には仕立てた年代や経緯、裂の贈り主まで記されるものもある。

これまで筆者が調査確認した前田家伝来能装束は約 300 点以上にのぼり、その約半数の畳紙に年代が記されていた。それは齊泰の父 12 代齊広と齊泰の時代にあたり、また贈り主としては、齊泰の母や妹、室、子といった身内や、近しい大名家がほとんどである。

そして、こうした畳紙墨書の記載と、齊広齊泰の演能記録を照らし合わせると、大規模な演能にあわせて装束が仕立てられていることや、藩主の有卦入りや慶事に合わせて能装束が贈られ、それらを披露する演能が行われていることが判明した。つまり、演能記録と能装束の双方を調べることによって、当時の演能の様子や背景、用いられた曲と装束の推定、そして交遊関係まで、より具体的に藩主の演能の実像を知ることができるのである。

こうした多くの能装束を伝える齊泰の時代は、四座の中で宝生流がもっとも隆盛を誇っていた。江戸時代最期の勸進能である弘化勸進能も、当時の大夫宝生友于によるものである。この勸進能には金沢の能役者も出演しており、江戸と金沢で能役者同士の交流があっ

たことを伝えている。事実、友于は晩年金沢に隠居し、そのまま没した。近代以降の金沢の能役者たちは、長く友于を慕ったのも納得できる。

一方、斉泰が能を習ったのも友于である。当時の將軍家斉は、宝生流を最上とする一橋家出身で、勢力を誇った背景には一橋家の存在が大きい。そして、家斉の女である溶姫を室に迎えた斉泰によって、加賀藩主の能も、再び盛況となるのである。伝えられる能装束は、これらの証ともいえよう。

こうした背景を探るべく、本論文では古文書類からも演能記録を調べ、斉泰の能について考察する。あわせて、加賀藩歴代藩主と能の関わりについてもふりかえり、必ずしも藩主のすべてが演能を好んだわけではないことや、記録がない藩主がいたことも指摘し、斉泰の能の特徴について考える。また、加賀藩において能が盛んとなったことの理由のひとつに、「御細工所の細工人の兼芸」が挙げられるが、そのはじまりとされる 5 代綱紀の時代に、綱紀の能の相手をした「細工人」としてたびたび紹介される加藤三兄弟について、彼らは元来細工人ではなく、囃子方の家筋の者であることを明らかにする。歴代藩主の能についてもまた『金澤の能楽』に記されているが、近年利用が容易になった演能データベースやインターネット上における公開資料を活用しながら述べていく。

そして、斉泰の能については、さらに詳細な検討を加えている。能装束が同じ年にいくつも仕立てられている弘化 2 年(1845)に着目し、斉泰の脚氣治癒を祝って贈られた装束であることと、その際記された『申楽免廢論』について述べる。これは能には妙理があり、あらゆることに通じること、能を舞うことによって脚氣が治癒したことなどを記している。藩士たちにも勧めたようで、写本や版本も伝えられている。

万延元年(1860)に「富山様」より譲られた能装束とは、その前年に没した富山藩 10 代前田利保の遺品を譲り受けたものだが、譲り受けたのは能装束だけではなく、実は富山藩政の実権をも斉泰が握ったことを意味している。富山藩のお家騒動も抑え、幼い我が子を藩主とすることで、幕末には斉泰は宗藩である加賀藩だけでなく、同じく斉泰の子が藩主であった大聖寺と富山というふたつの支藩をも手中に入れていたのだ。譲られた能装束は、その象徴といえる。

嘉永 5 年(1852)に仕立てられた能装束は、「古渡」裂という大陸から舶載された名物裂という貴重な裂で仕立てられている。嘉永 5 年といえば、前田家が家祖とする菅原道真の 950 年忌であり、前田家にとっても特別な年である。この年に披露すべく斉泰と友于によってつくられたのが、能〈来殿〉であった。これまで詳細に検討されることのなかっ

た〈来殿〉について、同じく道真をシテとする〈菅丞相〉や〈雷電〉と比較し、〈来殿〉の特徴を述べるとともに、斉泰によってつくられた「大富天神」とは、どのような姿であるのか考えていく。同年に仕立てられたという貴重な裂を用いた能装束も、〈来殿〉用と推察する。

さて、斉泰は明治以降、能楽の復興に尽力したことで知られている。明治9年(1876)の明治天皇の岩倉具視邸行幸啓能では、斉泰と七男利鬯(大聖寺藩14代)が舞っている。岩倉は幕府の崩壊によって衰退した能を復活した人物として知られており、明治初期の欧州視察において、能をオペラになぞるべく復興に着手したと語られている。しかし、当時東京を離れず舞台にて活動をつづけた梅若実の日記に、はじめて名前が出るのは、明治8年(1875)に催された斉泰が暮らす根岸邸の能舞台開きと遅い。恐らく、岩倉は根岸邸にて能を観たことによって、自邸にて天覧能を催すことによって、自己の存在をアピールせんと考え、斉泰もまた、自らが舞うことによって、明治天皇を奉迎せんと考えたと推察する。当時の前田家には権力もなく、東京への移住を強いられ、しかも明治7年(1874)に子慶寧が没していた。まだ10代の当主利嗣を支えるべく、斉泰は自家の正統性と家格を示そうと行幸啓能の実現に奔走したものと推察する。しかも、それは斉泰が暮らし、舞台を備えた根岸邸ではない。元和年間からの由緒を持ち、利嗣が暮らす本郷邸でなくてはならなかった。

斉泰はもっぱら根岸邸で能を催していたが、明治11年(1878)に珍しく本郷邸で袴能が催されたことが『梅若実日記』に記載されている。筆者はこれを、明治天皇の行幸啓能が迫っていたことを意味すると考える。しかし、実際に本郷邸行幸啓能が行われたのは、翌明治12年(1879)であった。11年の袴能直後に、旧加賀藩士によって大久保利通が暗殺されるという「紀尾井町事件」が発生したことから、本郷邸行幸啓能はいったん中止、または延期になったのではないか。同事件により、青山御所の舞台開きは延期している。明治天皇の北陸巡幸も間近に迫り、斉泰は旧加賀藩士に対する不信を解かねばならなかったのである。

このように『梅若実日記』は、天気、日々の出来事から、演能、来客、金銭のやりとりまで日々詳細に記されている。この『梅若実日記』が近年翻刻刊行されたことにより、近代能楽史をめぐる研究も盛んとなっている。

斉泰についても、東京へ移住する直前の明治4年4月までの記録は『加賀藩史料』に記されるが、その後、明治9年(1876)の岩倉邸行幸啓能までの斉泰の動向については、ほ

とんどわかっていなかった。本論文では、『梅若実日記』をつぶさに調べることによって、この時期の斉泰はあまり演能を催すことはなく、利鬯や慶寧による能が目立つことを指摘する。その理由として、斉泰はすでに隠居の身であったことや、宝生知栄(九郎)と不仲であったことが挙げられる。しかし、斉泰は明治6年(1873)の旧高松藩主による能を境に、再び演じるようになるのである。

むかえた明治12年(1879)4月、明治天皇の本郷邸行幸啓能はようやく実現する。天皇を奉迎したのは、斉泰ではない、利嗣であった。斉泰は明治天皇の前で〈張良〉を勤め、日を改めた行啓能の際は〈安宅〉を舞った。この両日の光景は、後に錦絵『前田家繁栄之図』として流布したほど、話題であったようだ。斉泰は〈安宅〉における弁慶の姿で見得を切る。明治天皇の行幸を仰いだことにより、前田家という家格を誇示しただけでなく、明治政府に反逆する旧加賀藩主のイメージをも払しょくしたのである。

そして、この本郷邸行幸啓能の冒頭を勤めたのが、長く不仲であった宝生知栄であった。その理由が梅若実の配慮によるものであることも、『梅若実日記』には記されている。

本論文では、あらゆる資料を精査することによって、これまで断片的にしか見えてこなかった藩主の能、または華族の能について考察する。能は単に娯楽としての芸能ではなく、時には交遊の証として、家格を示す手段として機能していたことがうかがえる。

江戸時代における藩主の能について述べるとともに、明治に入り岩倉と斉泰が天覧能実現に向けて動いたことが、やがて能楽復興へ至ったことを述べていく。

学位論文審査報告書

2020 年 2 月 12 日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学専攻

氏名 石立 尚子

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

前田斉泰と「能楽」

3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長	西村 聡	印
委員	森 雅秀	
委員	黒田 智	
委員	杉山 欣也	
委員	鈴木 暁世	
委員		

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、加賀藩主前田家 13 代前田斉泰（1811～1884）と能楽との関わりを、歴代藩主との比較によって、また斉泰自身の著作（謡本の制作を含む）の分析を通して、さらに前田家伝来能装束の畳紙墨書の情報を活用し、明治期の絵画資料を視野に収めて、詳細に論述した労作である（400 字詰め原稿用紙換算で約 460 枚）。斉泰の生きた時代は江戸後期から幕末・維新にかけての転換期に当たり、能楽史研究においては、斉泰が藩主時代に頻繁に能楽を催し、数多く能を自演したこと、明治維新以後の晩年は岩倉具視とともに能楽復興の先頭に立ち、「能楽」の呼称の定着を推進したことがよく知られている。能楽（能と狂言を合わせた呼称）を「能楽」と呼ぶことは、明治 14 年（1881）の能楽社の結成、芝能楽堂の建設により一般化するが、斉泰は能楽社発起人の中心にいて、「能楽」の額を揮毫し、「能楽記」という文章を書いた。これ以前の能楽は、斉泰が著作『申楽免廢論』の書名に使用したように、長く「猿楽（申楽）」を呼称としてきた。この事実一つを取っても、斉泰は転換期の能楽を語る上で最適の重要人物であると言えるのに、これまでまとまった研究書は上梓されていない。その点、本論文は、能楽史研究を離れ、斉泰の伝記研究として見ても、貢献するところが大きい。

さて、本論文は、序章と終章を別にして、五つの章で構成される。第一章は「加賀藩能楽史再考」と題して、藩祖利家から 11 代治脩までの歴代藩主と能楽との関わりを概観している。概観といっても、斉泰の父 12 代斉広以後の藩主と比較する目的のもとに論述されていること、近世能楽史研究の動向を広く全国的視野で把握し、その上で加賀藩能楽史の先行研究を渉猟していること、同時に『加賀藩史料』掲載の記録や加越能文庫所蔵資料など基本文献を多数活用していることなど、詳細な通史記述を信頼できる水準で提示している。この内第三節では、將軍徳川綱吉の影響（半ば強制）により藩主が能を演じ始める、そして同じく綱吉のひいきの影響で加賀藩が宝生流を採用する、その意味で画期となる 5 代綱紀の稽古について、従来、御細工人の加藤三兄弟が相手をしたと説明されてきたのを、その父加藤理右衛門は幕府抱えの大鼓方大蔵源右衛門の弟子であったことを突き止め、細工人が兼芸するというより、大鼓を本芸とする加藤父子が細工人として加賀藩に抱えられたと見るべきことを提案している。また第四節では、藩主に次ぐ加賀藩重臣たちと能楽の関わりについて、加賀八家の一つ、前田土佐守家の 5 代当主直躬が、加賀藩の抱える宝生分家ではなく宝生宗家（家元）に入門した時の誓詞など書状類を精査して、藩主の能楽愛好が重臣にまで浸透してゆく様子を明らかにしている。いず

れも加賀藩能楽史研究の今後の方向を示唆する有益な考察であると言える。

第二章は第一章で概観した時代につき、12代斉広（斉泰の父）及び13代斉泰の藩主時代における能楽との関わりを考察の対象としている。章末に掲載される17頁に及ぶ年表は、斉広・斉泰の演能記録を諸資料から集成したものであり、『加賀藩史料』の依拠資料に直接当たり、免状の情報なども加えて、文献資料によってどこまで詳細に状況を把握できるか、第三章における能装束の畳紙に記載される情報を活用するための基盤を、この章で提示したという位置付けになる。したがって第二章と第三章とで、取り上げる事柄に重複が生ずるのは、当然のことであるが、藩主による催能や藩主自身の稽古と藩の財政事情、富山藩・大聖寺藩の政治情勢の関係、また謡本刊行への藩主の関与、江戸藩邸における宝生家元父子や支藩との交流、などを視野に収めて、行き届いた論述がなされている。

第三章は「前田家伝来能装束研究」と題され、本論文の中核をなしている。まず第一節では、（一）において能装束研究の進展と現状を雑誌記事や展覧会図録、大型図版等を資料として詳細に記述している。（二）においては前田家伝来能装束を対象を絞って、（一）と同様の資料から大正14年、昭和11年の2度の売立を経て散逸した前田家伝来能装束の現状を把握している。これらを踏まえて、（三）において散逸した前田家伝来能装束の調査が各地で進むなか、能装束を包む畳紙に記載された情報が伝来を知る有力な手掛かりとされたとし、そうした先行研究に続いて本論文の筆者も、先行研究が紹介していない能装束の畳紙や畳紙のみ伝わるものも調査して資料を補完するとともに、前田家における能装束の制作時期の分布を明らかにした。この点を、第二節では斉広・斉泰時代の演能記録と対照して具体的に論述している。その（二）では売立を経て散逸した能装束を前田家伝来と判断する根拠として、売立目録掲載の写真のほか、畳紙の墨書、畳紙や装束に付される貼紙、そして前田家所蔵時に記録された2種の図巻を挙げている。（三）では前田育徳会が石川県立美術館に寄託する能装束15点（すべてに畳紙が存在）、石川県立美術館所蔵の前田家伝来能装束16点（内14点に畳紙が存在）を調査した結果がまとめられている（全29点について畳紙の記載事項を表に整理）。また、野村美術館及び彦根城博物館所蔵の前田家伝来能装束計101点も調査し、他の所蔵者の分、筆者未見の分も含めて「仕立てた年代が判明する能装束と畳紙墨書一覧」10頁に及ぶ詳細な年表を作成している。これを第二章掲載の演能記録と合わせることで、斉広・斉泰時代の能楽の状況が、特に能装束の制作という準備を通じて、能装束新調の費用と藩の財政事情、演ずる藩主と応援する親

族の心情（少なくとも親族の交流）など、催能・演能の背景まで具体的に追跡できる。この点
が他藩の能楽史研究には例のない加賀藩能楽史の特徴であり、本論文はその特徴を明確に打ち
出したところに意義が認められる。第四節では前述の前田家所蔵時に記録された2種の図巻の
内、特に狩野芳崖による東京藝術大学蔵本『加州家蔵能装束模様』全50図について調査した
結果をまとめている。50図の内、現在の所蔵者が知られるものは20点に過ぎず、残り30点
分を前田家伝来能装束に加えることができる上、この資料には能装束の模様だけでなく、畳紙
の墨書も転記されているため、(三)の調査を補完することもできる。畳紙の墨書に制作年代
が記された25点の内13点は、この資料によって新たに年代が判明した。さらに2種の図巻を
比較すると、前田育徳会本は藝大本をもとに、明治期（通説は江戸後期）に、複数人で模写し
たことも明らかになった。

第四章は斉泰が嘉永5年（菅原道真没後950年）に宝生大夫とともに制作した能「来殿」（「雷
電」の改作）について、前田土佐守家資料館所蔵の「能型付 来殿」の朱書きに注目し、「大
富天神」という神号が『菅公略伝』に基づくこと、前田育徳会所蔵の古渡裂を用いた2点の能
装束はこの「来殿」を演ずるために仕立てられたことなどを論証している。「来殿」の研究自
体が少ないなか、筆者ならではの一次資料の調査によって、今後の研究の基礎を提供したこ
とが評価される。

第五章は明治維新後の斉泰と能楽との関わりについて、近代能楽史の研究動向を踏まえた上
で、明治12年4月の前田利嗣邸行幸能の様子を描いた錦絵「前田家繁栄之図」や3年後に制
作された団扇絵に弁慶姿の斉泰が描かれることの意味を考察している。この錦絵は早くから知
られ、団扇絵の方は最近注目されるようになった。前田利嗣邸行幸能の背景を探り、前田家当
主の利嗣が若年であること、前年5月の紀尾井町事件（旧加賀藩士たちのよる大久保利通の暗
殺）の影響などを指摘して、斉泰が行幸能の実現を願い自ら舞台に立つ理由を考察している。
岩倉具視邸行幸能や華族能の流行、宝生九郎との確執や梅若実の存在など、広い視野のもとで
検討がなされ、紀尾井町事件の影響などは従来看過されてきた視点と言えるが、行幸能の実現
という「繁栄」が、そのまま肯定的に世間に受け入れられていたと見てよいのか、錦絵・団扇
絵の制作の意図は当時の新聞・雑誌の論調なども調査して、また錦絵・団扇絵自体の研究にも
目を向けて、多角的な検討が必要であると考えられる。

第一章から第五章までの論文本体をはさむ序章・結章には、本論文で問題として取り組み、

解明できたことの成果や意義を、いま少し明確に提示する工夫と論述の厚みが望まれる。また藩主が催能・演能に打ち込む理由、それに対する批判的な視線の存在などには、斉泰から距離を置いて考察を深めてほしい。そうした課題は残るものの、調査自体が容易でない貴重な能装束や一般に知られていない文献・絵画資料を数多く実見し、古文書類からの情報収集を中心とする能楽史研究に新たな分野を切り拓き、そのような研究方法の採用が可能な加賀藩能楽史の特徴を果敢に提示したことは、高く評価されてよい。審査委員一同、博士（文学）の学位の水準に到達していることを認め、合格と判定する。